



### 家づくりの第二步は、ここからスタート。 北海道マイホームセンター帯広会場

### 薬剤師

1957年(昭和32年)、帯広市生まれ。尺別小(旧釧路管内音別町)、標茶中(同標茶町)、足寄高、東邦大学薬学部卒。札幌市で漢方専門の真庭薬局、中国漢方堂に勤務した後、87年、富樫漢方堂薬局を同市中央区南17西9に開店。昨年20周年を迎えた。著書に「素顔の衣食拾」。

富樫漢方堂薬局のホームページは<http://t-kampo.com>

わたしの十勝

とがし 富樫 あきひろ 章博さん



生薬をストックした「百味筆筒」の前で、作業衣姿の富樫さん(札幌市中央区の「富樫漢方堂薬局」)

札幌市中央区山鼻に「富樫漢方堂薬局」を開店して二十一年になります。うちには、出来合いの漢方薬はありませぬ。お客さんの話を一時間から二時間かけてじっくり聞いて、すべてオーダーメイドで調合します。店ではいつも作業衣姿です。

生薬は二百〜三百種類を「百味筆筒」にストックしています。今どき、「百味筆筒」のある漢方薬局は珍しいんですよ。札幌のお客さんや鍼灸師の方などの紹介で、帯広や函館など地方の方も来てくれるよう

## 虫捕り、山菜採り、冒険 十勝原点に漢方の道へ

「富樫漢方堂薬局」を開店して二十一年になります。うちには、出来合いの漢方薬はありませぬ。お客さんの話を一時間から二時間かけてじっくり聞いて、すべてオーダーメイドで調合します。店ではいつも作業衣姿です。

思えば、現在私が生業としている漢方の世界へ誘う原点は、十勝にある気になります。特に生薬に「つづりはまり込み、趣味と実益を兼ねてまい進できた」帯広の環境と父親の存在が垣間見えます。

いつのまにか母親は引越しの達人となりました。異動の数日前から一人でせせと荷造りを行い、どこに何を仕舞ったか細かく段ボールに書き込んでいました。当日、手慣れた様子で手伝いの方の先頭に立ちテキパキ指示をしている母は頼もしく見えました。

帯広に住んでいたころは、祖母と父の姉妹との大戦争で早くに戦死した祖父の悲運のせいか、祖母は厳しい人でした。誰も祖母に逆らう事はせず、祖母の顔をうかがって生活していました。家の庭にはトウモロコシやエンドウ豆、キャベツ、トマト、ナス、イモ、ダイコン、ホウレンソウなどの野菜を植え、食の足しにしていた。

あのころは食べるのに懸命な時代だった事が思い出されます。近くに牛舎があり、搾りたての牛乳を毎日買いに行き飲んでいました。今からすれば最高のぜいたくです。その時の慣れでしょうが、今でも冷たい牛乳を飲みますが、おなかを覚えていて

その後は家族皆で「キー」「まだ生きている」「ワイワイ騒いで料理しました。ほろ酔い加減の父は舌になり、自慢話をさかんに食卓を囲むのは至福のときでした。



父のオートバイに初めて乗ったころ(幼稚園時代、帯広で)

あれこれ思い出の尽きない十勝のかかわりは、私にとって大切な財産です。